

# 第12期東京都生涯学習審議会 第5回全体会

## 次 第

日時：令和4年5月31日（火曜日）

午後2時から午後4時まで

会場：都庁第二本庁舎31階特別会議室27

### 1 開会

### 2 議事

「これからの地域コミュニティづくりにおける都立学校の在り方」  
について

(1) 野口委員からの報告

(2) 竹田委員からの報告

### 3 今後の予定

### 4 閉会

#### 【配布資料】

資料 第12期東京都生涯学習審議会第5回全体会 審議資料

# 第12期東京都生涯学習審議会委員

(任期：令和4年1月13日から令和6年1月12日まで)

氏名	所属
エビハラ シュウコ 海老原 周子	一般社団法人kuriya 代表理事
サイ ヒロミ 笹井 宏益	玉川大学 特任教授
サワオカ シノ 澤岡 詩野	公益財団法人ダイヤ高齢社会研究財団主任研究員
シシダ マナミ 志々田 まなみ	国立教育政策研究所生涯学習政策研究部 総括研究官
タケダ カズヒロ 竹田 和広	一般社団法人ウィルドア 共同代表理事
ノグチ アキナ 野口 晃菜	一般社団法人UNIVA 理事
ヒロシ タクジ 広石 拓司	株式会社エンパブリック 代表取締役
フクモト ミチヨ 福本 みちよ	東京学芸大学教職大学院 教授
マツヤマ アキ 松山 亜紀	株式会社セールスフォース・ジャパン 社会貢献部門 ディレクター
ヨコタ ミホ 横田 美保	特定NPO法人持続可能な開発のための教育推進会議(ESD-J) 事務局長

(令和4年4月1日更新)

第12期東京都生涯学習審議会

**第5回全体会 審議資料**

令和4年5月31日

- 1 開会
- 2 議事  
各委員からの「検討枠組み」を受けた提案
  - (1) 野口 晃菜 委員
  - (2) 竹田 和弘 委員
- 3 今後の予定

# 第12期生涯審 検討のための視点(事務局案)

## 都立学校施設 今後の効果的活用の在り方について

### 検討にあたり、必要な視点

①学校開放における  
学校教職員の負担軽減  
(学校の働き方改革)

学校における働き方改革推進プラン

②学校は教育機関である  
(地方教育行政法第30条)  
管理者の管理の下に自らの意思を  
もって継続的に事業の運営を行う機関

社会に開かれた教育課程

③都立学校は、  
都民の税金で建設された  
「公の施設」である

未来の東京戦略

### 「学校教育上支障のない限り」学校施設を開放

- 学校教育法 第137条  
「学校教育上支障のない限り、学校には、社会教育に関する施設を附置し、又は学校の施設を社会教育その他公共のために、利用させることができる」
- 社会教育法 第44条第1項  
「学校の管理機関は、学校教育上支障がないと認める限り、その管理する学校の施設を社会教育のために利用に供するように努めなければならない」  
※学校の管理機関:教育委員会とされる
- 社会教育法 第48条第1項  
「教育委員会は、その教育組織及び学校施設の状態に応じ、文化講座、専門講座、夏期講座、社会学級講座等学校施設の利用による社会教育のための講座の開設を求めることができる」
- スポーツ基本法 第13条第1項  
「公立学校の設置者は、その設置する学校の教育に支障のない限り、当該学校のスポーツ施設を一般のスポーツのための利用に供するように努めなければならない」

### 〈政策課題〉

「『未来の東京』戦略 version up 2022」

- ◇東京リカレント(仮称)の一翼を担う
- ◇インクルーシブシティ東京の実現
- ◇デジタル等を活用した高齢者のQOLの向上
- ◇人々のつながりや支え合いの輪を広げ、Communityを活性化する
- ◇スポーツのつながりを、まちの至るところに拡げる

# 第12期生涯審 審議にあたっての留意点

「学校開放」の今後の在り方を考える前提として、

- ①教職員に負担をかけないこと、
- ②「学校教育上支障のない限り」という視点を踏まえることが不可欠



## 審議にあたっての留意点

1. 「学校開放」と「地域に開かれた学校」
  - ・「学校開放」: 学校の管理機関である教育委員会が、社会教育法第44条並びに同48条に基づいて行うもの
  - ・「地域に開かれた学校」: 教育機関としての学校が、自らの意思をもって、地域や社会に対して、働きかけを行うもの(教育課程の実現のため、生徒にとって貴重な社会体験の場として「地域」を利用)  
※学校開放を議論する、その際地域に開かれた学校の視点も生かす
2. 社会的必要性(未来の東京戦略の視点)、地域のニーズ、学校のニーズがシンクロする視点を重視する
3. 都立学校は、小中学校とは性格的に異なることを踏まえる

# 第12期生涯審 学校開放のパターン化(都立高校の場合)の例

## 従来型

- 〈特徴〉
  - ・従来の学校施設開放のみを担う  
(公開講座を実施しない分、学校の負担は軽減される)
- 〈特徴〉
  - ・これまでの都立学校公開講座と基本的に同じ仕組み
  - ・但し、あくまで高校側の意思で実施することを前提とする  
(中等教育学校や専門高校には一定のニーズがあると考えられる)

②高校の教育機能開放

①学校施設開放

①学校施設開放

パターンⅠ

パターンⅡ

すべての都立高校での必須項目

高校が自らの意思で選択する

## 教育活動発展型

- 〈特徴〉
  - ・NPO等が高校の教育活動の「応用」「発展」を担う活動を展開してくれる場合に、NPOに学校施設を優先利用させる
  - ・高校はその対価として、キャリア教育や総合的な探究の時間の支援を受けることができる

③NPOと連携

①学校施設開放

パターンⅢ

高校の教育意思が反映される

## 都民の「学び」支援型

- 〈特徴〉
  - ・地域性や学校施設開放の利便性等を都教育委員会が判断し、区市町村や知事部局の施策展開等に協力する形の都立学校開放
  - ・体育施設だけではなく、学習文化施設も開放対象とする

④区市町村、知事部局への施設開放

①学校施設開放

パターンⅣ

学校の管理機関である都教育委員会が社会教育(赤色)の実施主体となる

- 〈特徴〉
  - ・都立学校公開講座のリメイク版
  - ・教員を公開講座の講師とするのではなく、TEPROサポーターバンクの登録人材をはじめとした教育人材の力を都民の生涯学習の推進に活用する

⑤教育人材の活用(地域還元)

①学校施設開放

パターンⅤ

コーディネーターが重要な役割を担う

## 野口委員からの報告

都立学校(高校)と連携・協働したインクルーシブな  
教育活動の在り方  
—都立学校施設等の効果的活用の在り方—



都立学校（高校）と連携・協働したインクルーシブな教育活動の在り方  
—都立学校施設等の効果的活用の在り方—

2022年5月31日 東京都生涯学習審議会  
一般社団法人UNIVA 理事/国士館大学非常勤講師  
博士（障害科学）  
野口 晃菜

# 自己紹介

一般社団法人UNIVA理事/国士舘大学非常勤講師

博士（障害科学）

小学校6年生の時にアメリカ・イリノイ州へ渡り、障害児教育に関心を持つ。高校卒業後に日本へ帰国、筑波大学にて多様な子どもが共に学ぶインクルーシブ教育について研究。小学校講師を経て、LITALICOの研究所長として、インクルージョンのための自治体・学校、少年院・刑務所との連携などに取り組み、その後一般社団法人UNIVAの立ち上げに参画、理事に就任。国士舘大学非常勤講師。経済産業省産業構造審議会教育イノベーション委員会委員、文部科学省新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議委員、東京都生涯学習審議会委員、日本ポジティブ行動支援ネットワーク理事、日本LD学会国際委員など。共著に「発達障害のある子どもと周囲の関係性を支援する」「インクルーシブ教育ってどんな教育？」などがある。

NHK u&i 監修委員、「でこぼこポン！」ドラマ監修。



# インクルージョンとは

すべての人が平等に大切にされ、所属感をもち、尊重され、参加できている状態。

インクルージョンのためには、マジョリティ属性を中心とした現在の社会のありようを変革し、マイノリティ属性も含めた多様な人がいることを前提に社会を設計する必要がある。



<https://www.cnn.co.jp/business/35155256.html>

<https://www.asahi.com/articles/ASM7X3G35M7XUTFK001.html>

様式例（厚生労働省様式例）

日現在	写真貼る位置 写真貼る必要が ある場合 1. 縦 2. 本人写真側の上 3. 裏面が白	年 月
氏名		
性別		
電話		
電話		
		年 月

「男・女」選択から  
任意記載に変更

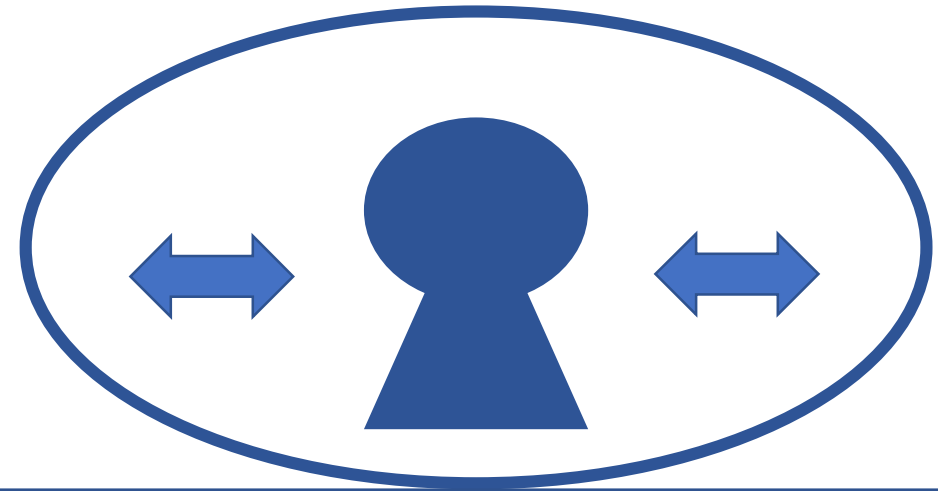
履歴書の性別欄に男女の選択肢設けず 厚労省が案作成

<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20210416/k10012977991000.html>

# 障害の医学モデルと社会モデル



個人の中に障害がある。  
障害に伴う問題の原因を「個人の障害（インペアメント）」に求め、障害のある人が社会に適応するためには、この個人の障害を治療したり、改善したり、目立たなくすることが必要（杉野, 2014）



個人と社会環境の相互作用の中に障害がある。  
障害に伴う問題の原因を、社会の側が障害のある人を想定していないことに求め、障害のある人がいることを前提として環境の側を変えていくことが必要。

# 日本におけるインクルージョンに向けた動向 (障害関連制度)

- 発達障害者支援法 (2005年施行)
- バリアフリー法 (2006年施行)
- 学校教育法改正 (特殊教育→特別支援教育へ) (2007年)
- 障害者虐待防止法 (2012年施行)
- 障害者総合支援法 (2013年施行)
- 障害者の権利に関する条約 (2007年署名、2014年批准)
- 障害者差別解消法 (2016年施行)
- 障害者情報アクセシビリティ・コミュニケーション施策推進法 (2022年成立)

など…

インクルーシブな社会の形成  
インクルーシブ教育システムの構築  
必要な環境整備や合理的配慮

# インクルーシブ教育システムとは

- 人間の多様性の尊重等の強化、障害者が精神的及び身体的な能力等を可能な最大限度まで発達させ、自由な社会に効果的に参加することを可能とするとの目的の下、**障害のある者と障害のない者が共に学ぶ仕組み**
- 障害のある者が**一般的な教育システムから排除されないこと**
- **自己の生活する地域**において初等中等教育の機会が与えられること
- 個人に必要な「**合理的配慮**」が提供されること

# 特別支援学校在籍児童生徒数は年々増加



(出典) 学校基本統計

※学校数は、平成19年度より、複数の障害種に対応できる特別支援学校制度へ転換したため、複数の障害に対応する学校及び複数の障害を有する者については、それぞれの障害種に集計している。このため、学校数及び在籍者数の障害種別数値の合計は計と一致しない。

# 特別支援学級在籍児童生徒数は年々増加

## 特別支援学級の児童生徒数・学校数の推移 (各年度5月1日現在)



特別支援学級在籍者数の推移



【令和2年度の状況】

	知的障害	肢体不自由	病弱・身体虚弱	弱視	難聴	言語障害	自閉症・情緒障害	計
学級数	29,162	3,150	2,518	537	1,294	707	29,287	66,655
在籍者数	138,232	4,685	4,312	643	1,965	1,495	151,141	302,473

(出典) 学校基本統計



# 特別支援学校と通常の学校の交流状況（2017年）

## 1 特別支援学校との交流及び共同学習（学校間交流）の実施状況

2～3割の学校が学校間交流を実施している。実施している学校のほとんどは毎年度継続的に実施している。

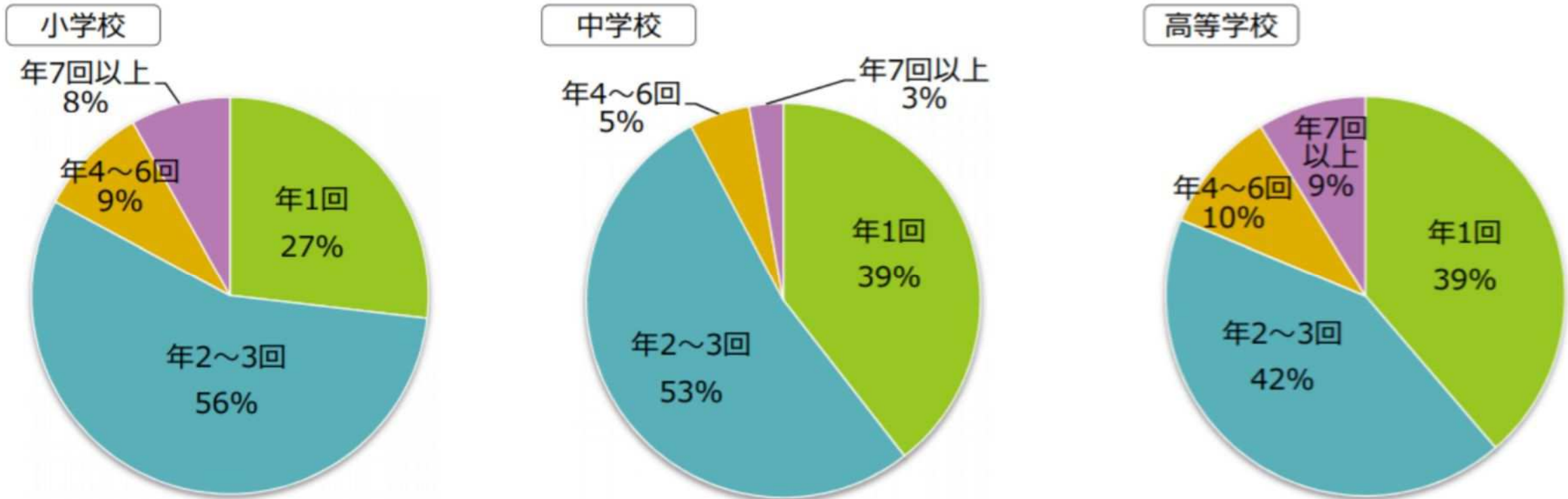
	小学校	中学校	高等学校
実施した	16%	18%	26%
うち、毎年度継続的に実施	15%	17%	25%
数年に一度実施	1%	1%	1%
実施していない	84%	82%	74%

[https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2017/10/30/1397010-3.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/10/30/1397010-3.pdf)

# 特別支援学校と通常の学校の交流状況

## 2 学校全体における年間の実施回数 (1で「毎年度継続的に実施」と回答した学校のみ回答)

各学校段階とも、「年2～3回」が最も多く、次いで「年1回」となっている。



# インクルージョンの現状

- 障害者権利条約の批准等を踏まえ、可能な限り共に学ぶインクルーシブ教育システムの構築が目指されている一方、特別支援学校や特別支援学級の在籍者数が年々増加している。
- 特別支援学校との地域の学校の交流については、ほとんどの学校が年に1～3回のみの実施であり、特別支援学校に通う子どもと地域の学校に通う子どもについて、地域における日常的な交流の機会がないことがうかがえる。

## 差別はよくないけれど...

- 施設コンフリクトの研究:  
約2割のみが自分の家の  
隣に精神障害者施設がで  
きることに賛成。
- 障害のある人と接したこ  
とのない人51%。
- “Not in my backyard”

「差別はよくないけれど、障害者施設建設には反対」 - 「施設コンフ  
リクト」をどう乗り越えるか。



野口晃菜 | 博士 (障害科学) / インクルージョン研究者  
10/27(水) 14:06



<https://news.yahoo.co.jp/byline/noguchiakina/20211027-00263692>

# 都立学校と連携した活動（案）

※①③④も基本誰もが参加できるインクルーシブなものにするが、活動しやすくするために②を設定

目的	①キャリア教育	②インクルーシブな活動	③居場所 相談支援	④生涯学習
対象	在籍高校生			
	都民			
実施者	NPO・企業等			TEPRO
条件	誰でも参加できるような環境整備・合理的配慮			

# 誰もが参加できるような環境整備

- バリアフリー
- 資料のルビ、手話通訳などの情報保障
- 参加ルールの明文化
- 何かあったときの相談窓口・責任者の明確化

※このコストやノウハウについては都が支援できると良い※

## インクルーシブな教育活動（案）

- 障害のある人と障害のない人が活動を通して交流ができる場
- 特別支援学校と地域の企業・NPO等との連携促進
- 特別支援学校高等部卒業生に対するアフターケア・余暇支援・生涯学習の場

# インクルーシブな活動（例）



<https://did.dialogue.or.jp/>



<https://yurusports.com/>



<https://www.camh.ca/en/camh-news-and-stories/camh-therapeutic-art-project>



## 相談支援・居場所・余暇支援

- (特に) 障害のある子どもが高等部/高校を卒業した後の支援
- 気軽に相談ができる (キャリア/福祉制度/余暇についてなど)
  - 地域の人々が相談員となることで関わる機会を創出
- 趣味サークルのような形での利用 (余暇支援)

## 竹田委員からの報告

都立学校(高校)と連携・協働した青少年の育成  
—都立学校施設等の効果的活用の在り方—



# 都立学校(高校)と連携・協働した青少年の育成 —都立学校施設等の効果的活用の在り方

東京都生涯学習審議会第12期 第5回全体会

令和4年5月31日

一般社団法人ウィルドア 共同代表理事 竹田和広

willdoor



# これからの青少年育成における社会教育の価値

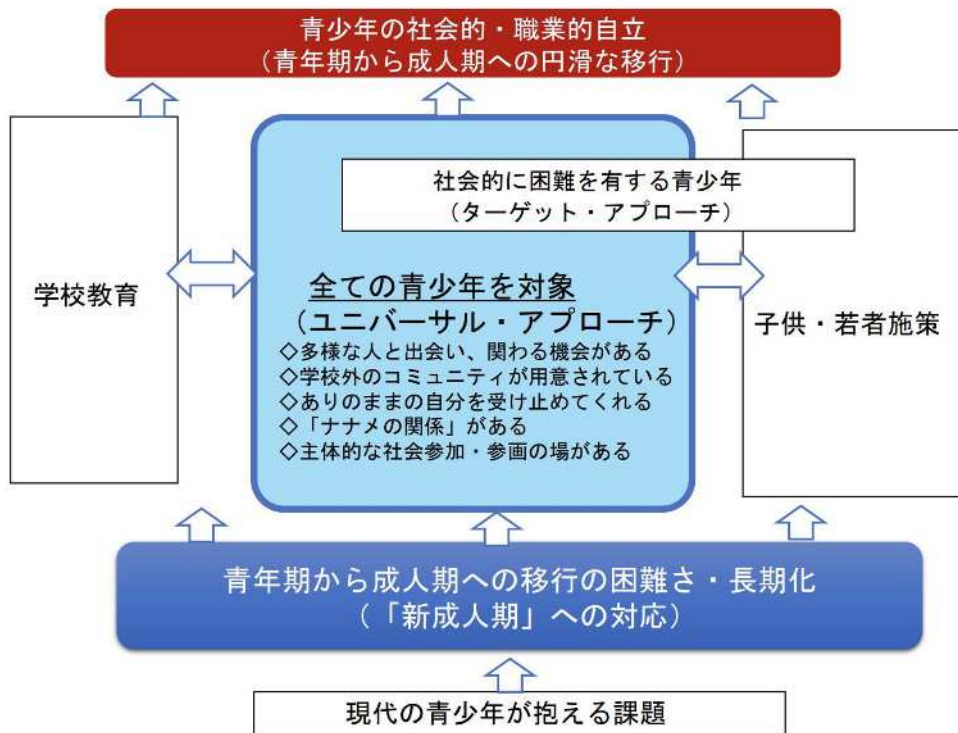
---



## これからの青少年育成における社会教育の価値



### 今後求められる青少年教育の役割



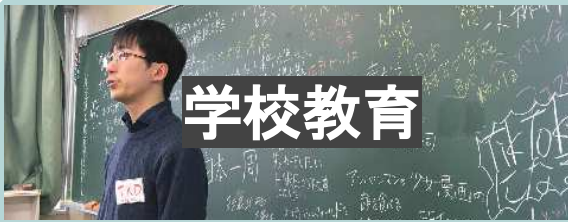
- 変化が激しく予測がつかないこれからの時代で、青年期から成人期の中に中間的な時期(新成人期)が現れ、成人への移行パターンが個別・複雑・多様化している。
- その上で、青少年にとって、先生や学校から与えられる学び・経験だけではなく、**自身の想いや関心に基づいて主体的に選択し、行動する中で自分のことや、他者や社会と関わることを知り、成長・変化をする経験**はとても価値がある。



# これからの青少年育成における社会教育の価値



一人ひとりの高校生の想いや関心に基づく主体的な選択・活動や経験を応援していく上で、社会教育の領域の役割は大きい。



## 学校教育

能動的には機会を求めない高校生に働きかけることができる。

カリキュラムとして系統だった場や機会を届けやすい。

人間関係が固定化し、異なる価値観に触れる機会が少ない。そのため、自分自身の価値観を表明することに二の足を踏んでしまう  
集団全体にとっての価値を優先し、個々人の期待・ニーズに寄り添いきれなし事が多い

強み

弱み



## 社会教育

非日常的な関係性により、自分の意志で普段発揮できていない個性や価値観の表現がしやすい

個に寄り添った機会提供・支援ができる

良いコンテンツがあっても、高校生にリーチできないことがしばしばある。

継続的な場や機会を届けるにはコストが掛かり、単発的な場や機会になりやすい。



全国に様々な機会・支援団体が存在し、オンラインも含め青少年が自分軸での学びを選択し、参加・行動できる環境ができつつある。

## <事例>とある高校生が1年間(2021)に参加/創造した課外プログラム・場

1/11	ぼくらの修学旅行ver.0 <企画運営>	7/10	SDGs FES in大坂<参加>
1/23	これからのキャリアの歩み方 <企画運営登壇>	7/17	Curbonフォトウォーク<参加>
1/28	「ぼくらがコロナ禍だからこそできること」<参加>	7/23	「ミレニアムとZ世代の狭間で」vol.4<参加>
1/30	高校生シンポジウム <参加>	9/28	クリエイティ部<参加>
1/31	未来station <企画運営>	10/1	THINK BIG FORUM<参加>
2/1	「生きづらさを乗り越えて居場所を作る」<参加>	10/2	ユタラボ <参加>
2/21	カダイ探偵 <参加>	10/5	LITALICOが目指す未来<参加>
3/28	【わーるず×フードロス】 <企画運営>	10/8	TeacherAide 茨城支部 #6<参加>
3/31	47都道府県高校生サミットvol.2 <参加>	10/9	proofS交流会<参加>
5/1	大学連携プロジェクトSEEK <広報/参加>	10/10	もあふる交流会<参加>
5/30	Teens Balloon <参加>	10/14	クリエイティ部イベント#1<参加>
6/12	若者環境アクションin姫路 <スピーチ登壇>	10/24	若者環境アクションin姫路<参加>
6/19	Youth conference hosted by Yokohama YMCA <参加>	10/31	COMING KOBE21 <企画運営>
7/2	Rethink Creator Seminar in神戸<参加>	12/12	GOALOOK学習塾 ~畏敬から考える人類の未来~<参加>
7/3	BASECAMP 異文化交流会<参加>	12/18	行くか、行かんか.<参加>



# ユニバーサルアプローチでの取組み 及び青少年を取り巻く課題

---





受験・就職以外の評価軸で行われる課外活動の存在や、そうした活動の価値を知るきっかけが少ない。

### <課外活動への参加経験の有無>

複数回、活動・参加したことはある13.6% (22人)

1度は活動・参加したことはある16.8% (27人)

何度も頻繁に活動・参加をしている6.8% (11人)

全くしたことがない **63%** (102人)

2022年5月7日神奈川県内の公立高校 3年生 162名へのアンケート調査(当社実施)

・学校では、キャリア教育・探究学習が「受験・就職」のための科目として扱われることが少なくない。

・それらを超えて自身の興味や想いと向き合い、欲しい経験・学びについて考える機会が少ないと考えられる。

・実際に、当社が実施したアンケート調査の結果を見ても自ら校外へと飛び出して経験・学びを得ることができている青少年の割合は多くない。



## 多くの高校生は学校外にある学びの選択肢を知らず、選ぶための情報も得づらい状況となっている。

### 学校側から情報提供を行うのは大変

- 情報が散在しており、情報収集が教員の負担になる。
- 信頼できるプログラムの選定が難しい。
- 学校教育と文脈が違いすぎて、高校生にどのように提示すべきか判断しづらい。



より一人ひとりの興味に基づく探究を応援するために課外の機会を活用させたいが、教員は情報を知らないし調べ方もわからない。たまたま目についたものを紹介するにとどまっている。  
(神奈川県 高校教員)

### 青少年一人ひとりが自ら情報を獲得し、必要な情報を見つけることも困難

- ネット上にはたくさんの情報があるが、どれが自分にとって必要な情報なのか判断するのが難しい
- そもそも、情報にアクセス(検索)するためのキーワードを知らないケースも。



「課外活動」「プログラム」という単語すらも知らなければ参加するかどうか選べないのだと気づきました。いろんなことをやっている人がいるんだと知れてよかったです。

プログラムの情報にそもそもとどり着かない(身近でない)ことに困っていた。

2022年5月に実施したWilldoor Forum参加者へのヒアリングにて得たコメント



高校生にとって、情報があっても学外での活動・機会へ参加する上で、はじめの一步を踏み出せない様々なハードルがある。

- **参加する時間がない/合わない**
  - 部活動、試験・模試、行事、塾等で忙しく、興味がある取組みがあっても参加しにくかったり、負担が多くて踏み出せない人も多い。
- **課外での活動・機会の選び方がわからない・どう考えていいか判断しにくい**
  - 課外活動を経験した先輩・知り合いも少なく、先生もその選び方や活用の仕方を語れないケースも多い。したがって、相談できる人もいない。
  - いろいろな情報を得ても、自分画素のプログラムの対象者なのか、内容が合致しているのかが判断できない。
- **同じ関心を持つ仲間と出会いにくい**
  - 日常の学校生活では、自身の興味で何かに取り組むことについて話す機会が乏しい場合が多く、またクラスや部活など交流が限定的な事が多い。
  - そのため、自身の興味があることに共感し、背中を押したり共に高め会える仲間と出合いづらい。



「社会教育団体にとっても、活動を展開する上で、「自分達の想いを受け取ってほしい高校生」になかなか届けきれない壁も多く存在する。

### 外部から高校生に機会提供・サポートを行うのはハードルが高い

- 様々な専門性・問題意識から高校生世代をサポートする意志のある人や団体は多数存在する。しかし「高校生集客（効果的に情報を届ける手段がない）」や「会場確保（適切な場所がない・お金がかかる）」が難しいことにより、機会損失が多数発生している。

↳ 経験値を積みづらいことにより、意思ある個人・団体の業界離脱も多い。

### 対象層/ターゲットによる団体間の繋がり・相互理解が弱い

- ↳ 東京都内には既に様々なプレイヤーがいる一方で、お互いの活動・存在を認識していないケースも多い。
- ↳ 青少年が一つのプログラムに参加しても、そこでの学びを踏まえた次の場や機会に高校生をつなぐことが出来ず、その場で学びが止まってしまっている。



# 都立学校施設等の効果的活用のアイデアと 私たちの想い

---



## 学校という「施設」の持つ強み



高校生にとってハードル低く一歩踏み出しやすい場であることが、青少年教育における学校という施設の最大の強みである。

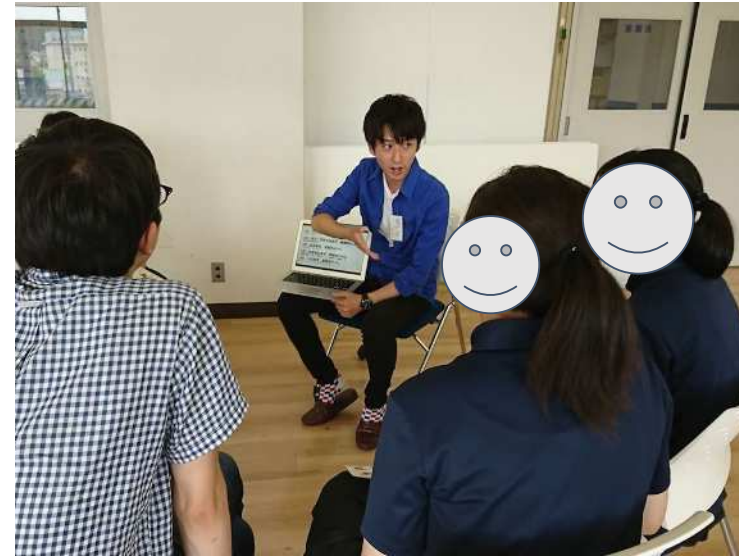
生徒・先生・保護者にとって安心安全な場である。

- 学校の中で実施されているということで、先生・生徒・保護者から信頼されやすくなる。

→ 先生等からのリコメンド、友達からの誘いなどにより参加するきっかけが生じやすく、また高校生が自分の保護者への説明もしやすい。

生徒にとっての課外での活動の起点となる場であること。

- 授業終了後や、部活前後の限られた時間を有効利用でき、最も時間的ハードルが低い場所である。

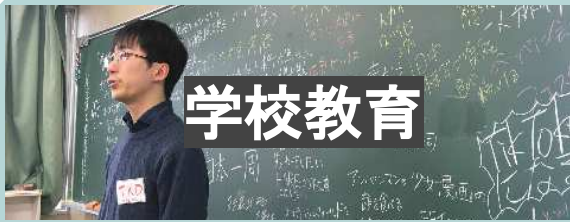




## 効果的活用の在り方(コンセプト)



学校教育の強みと社会教育の強みをかけ合わせ、より多くの高校生が自身の思いや関心に基づく学外での活動・経験・学びへと踏み出す事ができる「社会教育と学校教育の資源共有モデル」を生み出す。



能動的には機会を求めない高校生に働きかけることができる。

カリキュラムとして系統だった場や機会を届けやすい。

人間関係が固定化し、異なる価値観に触れる機会が少ない。そのため、自分自身の価値観を表明することに二の足を踏んでしまう  
集団全体にとっての価値を優先し、個々人の期待・ニーズに寄り添いきれない事が多い

### 学校開放事業

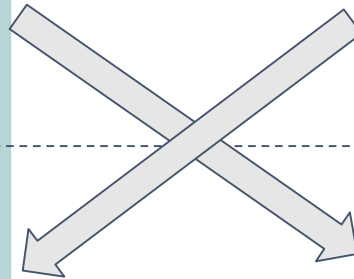


非日常な関係性により、自分の意志で普段発揮できていない個性や価値観の表現がしやすい

個に寄り添った機会提供・支援ができる

良いコンテンツがあっても、高校生にリーチできないことがしばしばある。

継続的な場や機会を届けるにはコストが掛かり、単発的な場や機会になりやすい。



強み

弱み

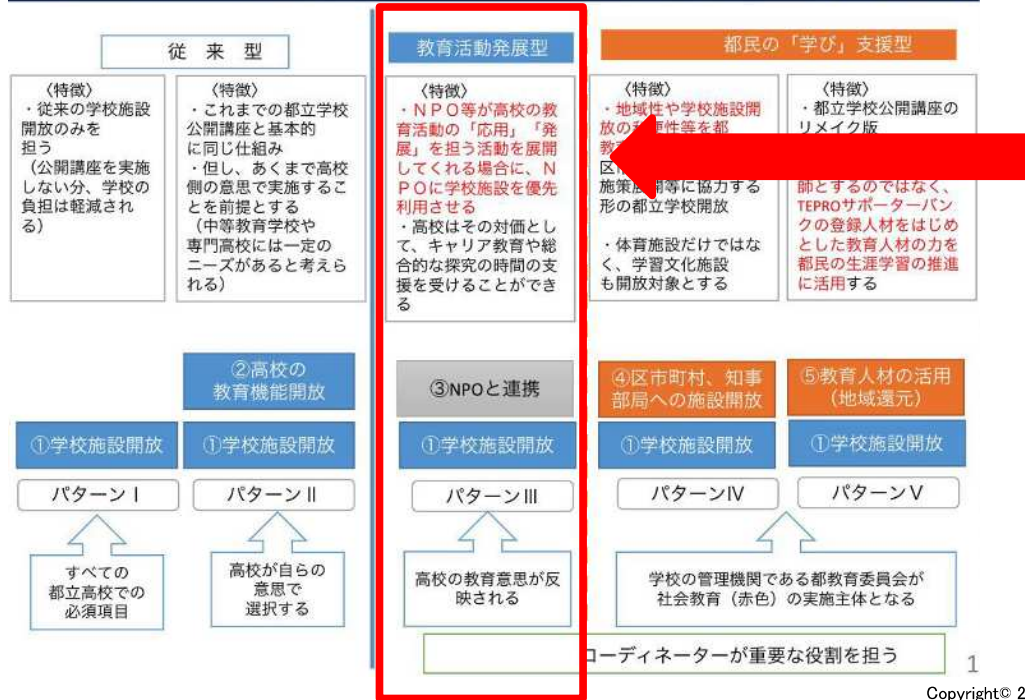


# 効果的活用の在り方(前提)



すべての学校で統一行的に行うのではなく、実施可能な学校を活用し、生徒のさらなる自主的な学びを応援する「教育活動発展型」をベースとした学校開放事業を想定。

## 第12期生涯審 学校開放のパターン化（都立高校の場合）の例



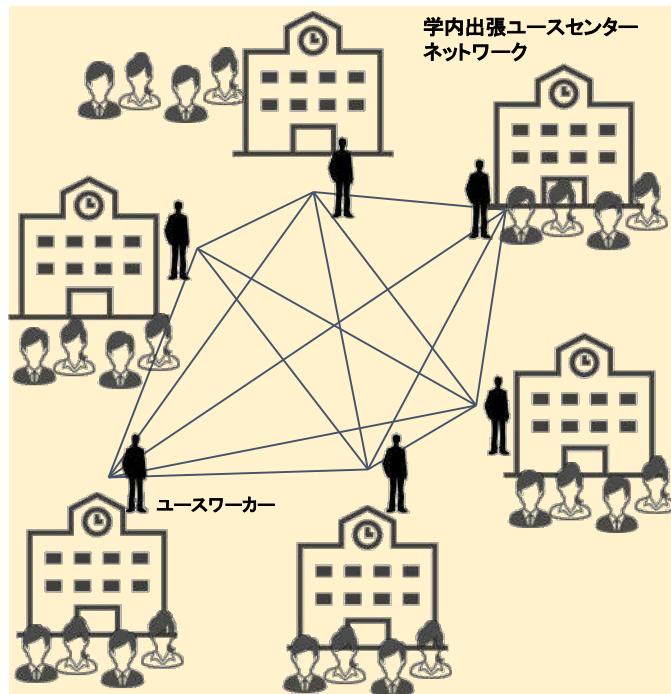




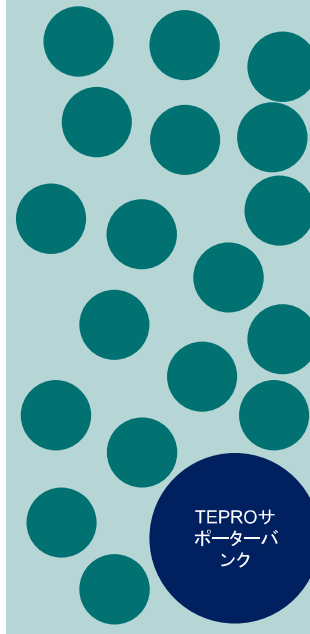
## 都立学校施設等の効果的活用アイデア：学内出張ユースセンター構想



学校の中に、学校の管轄ではない、一人ひとりの高校生の想いや関心に基づく主体的な選択・活動や経験のサポートができる場所と仕組みを作る。



社会教育等の外部団体/個人



<ポイント>

- ①ユースワーカーを高校ごとに設置し、生徒が自らの想い・関心に基づき活動することを、空き教室等を活用して校内で定期的にサポートする。
- ②学校内資源だけでなく、社会教育等の外部団体/個人と高校生をうまく繋げ、自ら学外で繋がりや経験を獲得できるようなきっかけを創る。
- ③都内の学内ユースセンター同士が繋がりが合えるシステムを設計し、学校・エリアをまたいだ高校生同士を繋げ、同じ関心を持つ仲間との出会いを生み出す。
- ④学校教育と社会との接続に関するサポートも行う。



## 様々な外部団体・機会と出会い、選択肢を拡げるきっかけを 学校内にて「高校生中心」で創りだす。



参考事例:三浦学苑高校 よこすか・ゆめ・みらい(2019)

### 具体案①:様々な外部団体と協働した課外プログラム・企画の実施

- 「高校生世代へ伝えたい・支えたい。」そんな思いを持った様々な領域・分野における企業・NPO・個人によるプログラムを学校内にて実施。
- 担当のユースワーカーが中心となり、学校や地域社会の意図だけではなく、**高校**生たちの想いや関心に基づいて実施できるような仕掛けを作る
  - 例1:投書箱のような形で、高校生が気軽に「こんな人に会いたい」「こんなことを学びたい」「こんな機会を探している」を表明できる仕掛けを作る(リアル/オンライン共に)
  - 例2:その学校の高校生を中心に実行委員会のようなチームをつくり、高校生たちが関心ある団体や個人を呼んで特別なプログラムを実施する。
- 社会問題からビジネス、趣味的な内容まで、幅広い分野・テーマの企画を実施。直接的なキャリア・進路支援に限定しない。
- 内容に応じて、高校生以外の参加者も募集(要・事前申込)、卒業生や地域の方、その団体のファン等が集う**多世代での学びの場**に。



# 都立学校施設等の効果的活用のアイデア:学内出張ユースセンター構想



## 参考事例:よこすか・ゆめ・みらい(三浦学苑高校)



### <概要>

高校生24名が、2人組で横須賀の未来に関する12のテーマ(教育、福祉、政治、人権etc...)に分かれ、学校の様々な教室で各1時間×3回、専門家を交えて地域の参加者とともに対話をする。

### <ポイント>

✓高校生自身がテーマを選択するとともに、話を聞きたい専門家に**自分たちでアポを取り招待する**。

✓**高校生自身が**地域の方へ告知を行い、参加者を募集。

✓運営もすべて高校生が実施。学校・教員はあくまでサポーター

✓学校全体を活用し、合計300名以上の方が参加。



本事例での気づき



○高校生が自ら学びを企画することが、**地域住民・関係者の学びの機会にも**なっている。

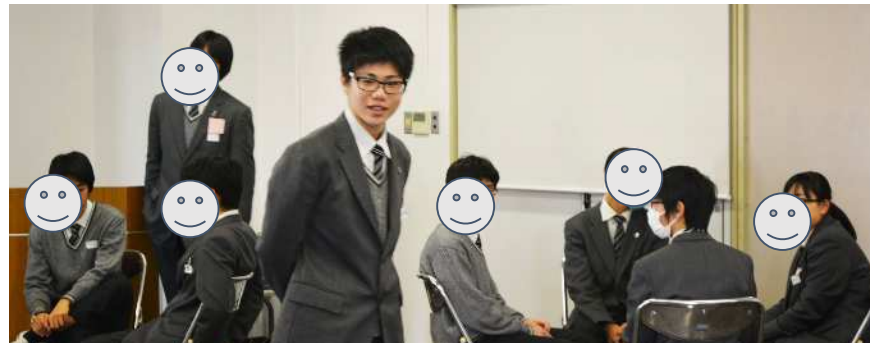
○学校という場を使えるからこそ、大規模な企画も高校生にとって**低コストかつハードル低く**挑戦でき、先生・保護者も**安心して**その挑戦を見守ることが出来る。



## 一人ひとりの高校生の想いや関心に基づく主体的な選択・活動や経験サポート施策の実施



参考事例:よこすかラボ(学校内説明会・相談会)



参考事例:マイプロジェクト

### 具体案②:情報共有・つながりの情報共有の機会

- 学外でプログラムに参加したり挑戦した高校生による活動報告会の開催や、プログラムチラシ等の設置、個別相談にて学校外の様々な機会(イベント・活動助成金等)・外部団体の情報提供を一人ひとりのニーズや課題に応じて届けることが出来るような機会を創る。

### 具体案③:個人の想い・興味関心に寄り添いそれぞれの活動への 伴走

- 社会資源を活用した活動・探究プロジェクトの計画や具体的な行動をすることへのアドバイスや背中を押すような相談やサポート機会を外部協力者と連携しながら設計(OBOGボランティア等の活用も想定)
- 教室等学校施設を使って、高校生自身が外部を巻き込んだイベント・会議等をする事もサポート



# 都立学校施設等の効果的活用のアイデア:学内出張ユースセンター構想



## 参考事例: Willdoor Forum-みんなで作るプログラム合同説明会イベント(主催 ウィルドア)

**第1部: 課外活動体験記**

こちらは当日の第1部に行う課外活動体験記の登壇者情報及びタイムラインとなっております。  
テーマやハッシュタグからご自身の気になる登壇者を見つけ、ブースに移動してください。  
登壇者の詳しいプロフィールは右記のQRコードよりご確認ください。  
※各チームの間に別のブースへ移動していただくことも可能です。



	Aブース	Bブース	Cブース
15:35	「課外活動のトリセツ」/登壇者 @kousai_1000 @kousai_1000 @kousai_1000	「課外活動によって、180度変えられた書 目の見出し」/山田 真由美 @m.yamada @m.yamada	「ハイスピ高校生生の開発記録」/浦口 莉奈 @r.pukui @r.pukui
15:45	「ぼく達が現場に立ち向かった時の話。」 /登壇者 @kousai_1000 @kousai_1000	「飛び出していき」/宮城 麻衣 @m.miyagi @m.miyagi	「ちょっとやってみる」ができるように なろう」/高橋 優 @y.takahashi @y.takahashi
15:55	「活動とわたしー学生団体活動の私が考 える課外活動ー」/登壇者 @kousai_1000 @kousai_1000	「経験はないが思いはある」/山口 穂花 @h.yamaguchi @h.yamaguchi	「自分がやっていたくさんのものを管理で 課外活動で試してみたいのを聞いて下さ るの長所」/田嶋 トラ @t.tajima @t.tajima
16:05	「課外活動のトリセツ」/登壇者 @kousai_1000 @kousai_1000	「あーっ、課外活動で世界の広さを知 る。」/高橋 真由美 @m.takahashi @m.takahashi	「自身の成長」/藤井 優乃 @y.fujii @y.fujii
16:15			

### <概要>

全国の課外活動に関心のある高校生を対象に、様々な課外活動をする高校生・大学生が自身の体験談を発表。その後個別相談ができるブースも用意。

### <ポイント>

✓大人が話す・相談にのるのではなく、**同世代が語り相談にのる**という形式にて実施。

✓13名の様々なテーマで活動する高校生・大学生に経験談を話していただくことで、**参加者自身が聞きに行く相手を選択し**、能動的に情報を取得できた。

✓参加者の半数以上が、その後登壇した学生の関わるイベントや学生団体へと参加したいと回答。実際に参加した事例も。

本事例で  
の気づき



- **同世代の挑戦の姿や経験談は強い影響力があり、そのつながり**は活動する上での大きな力になる。
- **なにから始めて良いのか、どう調べれば良いのかなど、情報だけでなくその扱い方や自分なりの活動の道筋を考えるためのサポート**があると、より一歩踏み出せる人は増える。



## 生み出したいストーリー例



高校に入ってなにか、部活以外の活動もしてみたいけど、何していいかわからないAさん

- ①学校に貼ってあったポスターで存在を知り、WEBで学校の中で行われているプログラムを知る。少し興味があるものに参加してみることに。
- ②いくつか参加しているうちに、環境問題により関心を持つようになり、たまたま一緒に参加していたこの場で出会った友達の誘いで夏休みに外部のイベントに参加することに。
- ③様々な高校の同世代とも出会い、その中で学生団体にも参加することに。団体の挑戦として、学校内で自分たちで環境問題について気軽に話せるイベント企画を思いつく。
- ④自分の学校のユースワーカーに相談。実施することに。
- ⑤他校も含め同世代・後輩も参加するイベントに。あらたな仲間も生まれ、何世代にも渡って活動を継続。



やりたいこと明確。探究テーマあるけど どうしていいかわからないBさん

- ①ジェンダー問題に関心があり、学校の探究の時間で自分なりに調べているなかで、文献等ではわからないことも多く先生に相談
- ②先生も一緒に団体を調べるが、どこがどういう取り組みしてるのかよくわからず、ユースワーカーへ相談するよう促す
- ③学校開放の教室に行き、個別相談。一緒に社会教育・外部団体を調べて見て、まずは学校に呼んでお話を聞く会を企画
- ④他校からも参加者が集まり、一緒に話を聞く中でどんな取組が世の中にあるか等、様々なキーワードを知ると共に、新たに会いたい団体を見つける。
- ⑤そこで出会った仲間とともに、他の団体にもヒアリングをし始める。



## 生み出したいストーリー例



漠然と興味あることはあるが、  
特になにか自ら動いていたわけではないDさん

- ① 先生からの紹介で、学校内で行われていた地域活性化に関する団体によるワークショップに参加
- ② 地域で活動するNPOに参加する住民も参加。話していてとても楽しく、その人が参加している取り組みに関心が高まる
- ③ そこで出会った人の誘いで、地域のNPO活動へ参加。探究のテーマもその活動のことにし、進路もまちづくりについて研究できる大学を選ぶことに。
- ④ 活動にハマり、大学生になってからも活動継続。その団体で愛される若手メンバーとして活躍する。



家庭に困難を抱えつつ、誰かに相談することができていなかったBさん

- ① 友達の誘いで、放課後に行われている学校内に臨時で作られたカフェでおしゃべりすることに。
- ② スタッフが話しかけてきて、最初は警戒しつつも話しているうちに仲良くなる。何回かそのカフェにも行くようになる。
- ③ スタッフと話す中で家庭の事情で大学進学が難しいことをポロツと打ち明けたところ、知らなかった奨学金等の情報を教えてもらい、視野が広がる。
- ④ その後も様々な情報をもらいながら、自分のやりたいことを考える様になり、サポートを受けながら勉強に集中。
- ⑤ 無事に大学進学し、卒業後もそのボランティアスタッフとして後輩に定期的に関わるように。



## 教員にとっても、社会教育団体・個人にとっても実施するメリットのある事業に。



### 学校・教員にとって

- キャリア教育・探究学習等で社会とよりつながるかたちでのプログラムを作る際に、**繋がりがりや情報面でのサポート**を受けることができる。
- **カリキュラム内でカバーしきれない機会やインプットを届ける機会**として活用できる。(探究のテーマ設定における多様な分野のインプット、モチベーションを上げることが出来るような機会等)
- 進路指導も含め、様々な事情(業務量・専門分野等)にて対応しきれない**個別の生徒へのフォロー・後押しについて頼れる相手**が出来る。
- 学校の特色として打ち出すことが出来る。



### 社会教育団体・個人にとって

- **普段リーチできない層の高校生にも機会を届けることが出来る**ことで、事業の実現及び発展をすることが出来る。
- **学校のカリキュラムにはまらなかったコンテンツでも、相性のいい高校生へよりハードル低く届けることが可能になる。**(団体の持つ資源を最大限活かす形での機会を創ることができる)
- **会場の確保と集客に対してのハードルが下がる**ことで、複数回でのプログラム実施など、よりその団体・個人の持つプログラムの価値にこだわって実施することが出来る。



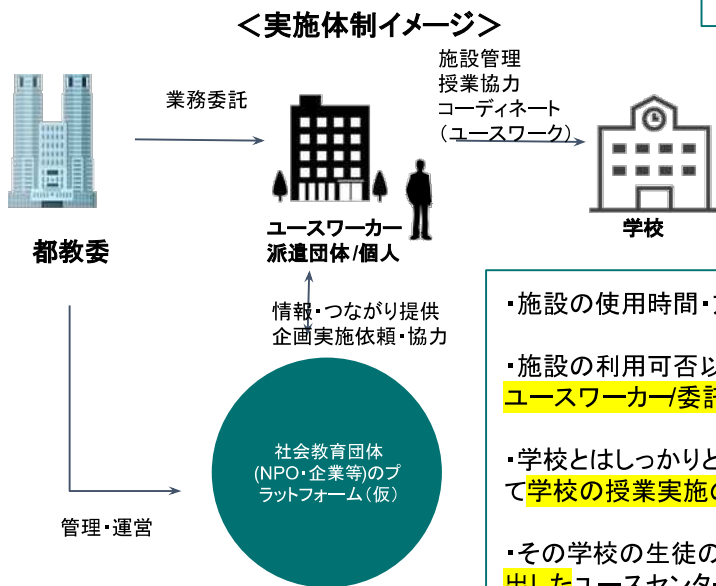


# 都立学校施設等の効果的活用アイデア：学内出張ユースセンター構想



学校と管轄を分け、一人ひとりの高校生中心の場とするためにユースワーカーの権限をしっかりと担保するとともに学校ごとに特色を出した形でのユースセンターを設置できるように。

## 事業の枠組み案



- ・施設の使用時間・方法に関しては学校と相談の上確定。
- ・施設の利用可否以外の内容については基本的にその決定権は、ユースワーカー/委託団体に委ねる。
- ・学校とはしっかりとコミュニケーションを取り、委託業務の一部として学校の授業実施のサポートも行う。
- ・その学校の生徒の性質や特徴も踏まえた上で学校ごとに特徴を出したユースセンターを設置。  
(それぞれの目的に合った社会教育団体等をコーディネートする)

## ＜実施形式のパターン＞

- 実施日程でのパターン
  - 週末等の不定期実施
  - 放課後・週末等で固定曜日・時間の定期実施
  - 常設実施
- 重点目的でのパターン
  - 居場所・社会的自立
  - 探究活動の発展・促進 etc.



## 学内出張ユースセンター構想実現のためのその他必要な施策(具体案)



- **高校生へと情報・魅力がしっかりと届く仕組みの構築**
  - 学校の垣根を超えて、それぞれの拠点で行われる施策の情報を高校生がみつけやすように、**WEB及びSNS・LINE公式アカウント等**の情報に触れることができる仕組みを作る必要がある。
  - **学校と連携し**、探究等の授業などつなげる形で告知をできるように調整したり、学内出張ユースセンターの情報が発信されるLINE公式アカウント・SNS等を生徒へリコmend・告知をしたり、学校内に定期的にチラシを掲示できるように。
  - 実施プログラムについては全体として **カッコいい/魅力的に見えるコンセプト**を打ち出し、高校生たちが使いたくなるブランディングを行う。
- **社会教育・外部団体のプラットフォーム**
  - 教育委員会、もしくはそこから委託を受けた団体による認証をし、**安心してユースワーカーや学校が活用できる外部協力者のプラットフォーム**を創ることで、ユースワーカーのつながりに依存することなく、ユースワーカーや高校生が活用できる豊富な外部資源を可視化し、より一人ひとりのニーズに合った資源へと繋がりやすくする。
- **教室の改修・魅力化に関する費用補助**
  - よりイベント・企画に使用しやすく、**居心地のいい魅力的な空間を創るための費用補助**を行うことで、高校生の集客率を高めるとともに、学校としても授業にて活用できる創造的な場を得ることが出来るということでインセンティブを高めることが出来る。(コラボレーションスペースのような、ワークショップ・対話等に適した空間づくりなど)



## 新しい学校開放事業への期待と願い



学校に社会への「入り口」と「案内人」を設置することで、一人ひとりが自らの選択による様々な経験から成長し、自分・社会の幸せへと学び続けることができるシステムを。

### 社会教育と学校教育の資源共有のモデル



画一的な与えられる学びから、**青少年一人ひとりの可能性を開く**  
**自ら選択し、創り出す学びを後押し**

「学校」という場のもつ機能を  
「学校教育」だけでなく、**「社会教育への入り口」まで拡張し、**  
全体の「都立学校」における  
学びの環境をより豊かに。

